

第7回学習会を、平成20年6月20日（金）19:00～20:00 教育センターにて行いましたので報告いたします。

第七回目の内容

講師 重枝一郎先生（千代中学校教諭）

- 1 班の活用の意義
- 2 実践ビデオ紹介
- 3 エクササイズの体験活動

1 班の活用の意義

「今 なぜ 学級集団の育成なのか」

(1) 人間関係は自己の確立を支援している

- ・生徒は自分で悟って自己概念をつくっているのではない。友達から「君ってこうだね」というフィードバックをもらって自己を確立していく。

(2) 人間関係の問題は、それを避けては解決しない

- ・ぶつかった時に、どうすればいいかが重要。関係性の中で生きる個性が大事。

※人間関係を築くときに、ぶつかる、ケンカするのは「あたりまえ」という考え方をもつ。

そのことを生徒にも話し、「ぶつかった時にどうするか」を学ばせる。

(ぶつからないため→アサーショントレーニング、ぶつかった時→ソーシャルスキルトレーニング)

「目標とする学級集団」

(1) 集団の中で個人がいきるクラス

- ・目標とするクラスは互いに気持ちよく生活できるためのマナー（ルール）が定着していて、ふれあい交流ができ、積極的に協力原理が働く集団である。

(2) 学習集団と生活集団の両側面を形成する

- ①学習集団に参加させる
 - ②生活集団を形成させる
- } 相互作用が当然ある

(3) 小グループの取り組み

- ①友だちの考え方や行動を参考にしたモデリング学習
- ②友だちの目を通した自分についてのフィードバック
- ③自分と友だちの行動、感情、考え方の違いの比較から、新しい気づきがある

※良いクラスはこんなクラス、悪いクラスはこんなクラスということを、はっきり生徒に話す。「何となくこうなってほしいなあ」と教師が思っているだけではなく、学級集団の現在地はこうで、目的地はこうだということを、生徒にはっきりと言う。そうすることで、生徒も意識し、気をつかうようになる。

また、**集団の教育力**である①モデリング学習②フィードバック③新しい気づき、については前ページ の内容を教室掲示するのも、効果的である。

道徳でやった内容を授業でも関連づけることで、相互作用がうまれる。

例えば、授業中に「友だちのノートを見ていい時間」をつくる。そうすると、友だちがノートをとっていることやノートの中身について、モデリング学習をしたり、新しい気づきがあったりする。確実に授業中にこぼれていく生徒が少なくなる。

道徳の授業であれば、「へっ」という「自己盲点」に気づく場面がある。それは、友だちの目を通した自分へのフィードバックとなり、自尊感情が高まることにつながる。教師が「**集団の教育力**」を意識することで、生徒に自覚させる場面を作り出すことができる。

☆ 集団づくり

集団主義

————— × —————

集団教育

- ・ 違いよりも同じ面を強調して
個々のメンバーを基準に合わせるだけ

- ・ 個を育成するために
集団体験を活用すること

同 調

————— × —————

協 調

- ・ 自分を殺して他人と合わせる

- ・ 違いを認め合い個人が独立しているなかで、互いと折り合いをつける

この違いは**集団づくり**に関連づく

※「**集団主義**」と「**集団教育**」の違い、「**同調**」と「**協調**」の違いをきちんと生徒にも説明する。実際に生徒が同調している場面があれば、それを指摘し、望ましい集団を意識させる。

☆ 効果的なグループ体験の条件

目的地

- (1) 集団内にふれあいのある人間関係がある
(素直さ・受容的・共感的・援助的) ※ビデオ「ブラインド・デート」
- (2) メンバーが自己表現したり他のメンバーと積極的に関わる方法や場面がある
※ビデオ「冬山からの全員脱出」

マナーの共有

{ 言われて守るのではなく
暗黙のうちに心にもつ
ことが必要 }

認められる場面や方法を設定

{ 自己有用感をもたせる
体験型エクササイズ }

個々の状態のアプローチ

{ 受容的 }

※目指している「目的地」を生徒に理解させることは、「なぜエクササイズをしているかという教師の意図」を理解させることでもある。ただ、楽しく遊んでいるのではないということをはっきり認識させ、生徒にも「目的地」を目指させることが大切である。そして、あらゆる場面で「関連づけること」を意識させていく。

「マナーの共有」については、「生徒が暗黙のうちに心にもつこと」が望ましい。教師がワーワー言うのは、カッコ良くない。

そのためにはどうすればいいのか？ ポンとそうはならない。毎回毎回、「しつけ」と「感情交流」を教師が意識することと、何より生徒が満足感を得ていることが大切である。満足型を常に目指すことである。ただきちんとするのではなく、きちんとしていれば楽しくなることを、生徒が実感することである。

「ルールの暗黙化」が徹底できるまでは、教師が自分の思いを語る時間が増えることになる。「こんな風に気づいてほしい」という思いを語ることである。なぜ、このようなワークシートをつくったのか、このエクササイズをしているのかなど、自己開示して自分の気持ちを言う。そうすると、だんだん「響き合う関係」が築けるようになる。生徒同士も生徒と教師の関係も。そうすると、クラスの中に安心感のある、落ち着いた雰囲気うまれてくる。ビジョンをもって1時間の授業を積み重ねることで、そのような「風土」がうまれてくる。くり返し積み上げていくことでしか、「響き合う関係」をつくることはできないし「ルールの暗黙化」をうみだすこともできない。



親 和 動 機 を満たすために

- | | |
|---|-----------------------------------|
| A | 頼りになる人を身近に求める欲求 |
| B | 認めてくれる人を求める欲求 |
| C | 比較対象する他者を求める欲求 |
| D | かかわりあうことで、活気・やる気・楽しさが得られる他者を求める欲求 |

↓
階層化

※「親和動機」については、A、Bを求める欲求が、小・中学生には強い。当然のことでもある。Cの「比較対象」で心理学的に言われていることは、A、Bの欲求が十分でないときCがゆがんだ形であられる。つまり自己評価ではなく自己満足をするために、比較対象者を見る。

ソーシャルスキルとエンカウンターについては、常にセットで考え、指導していく。どちらかができていない場面を「チャンス」ととらえて、指導を入れる。チャンスをとらえることができる「感性」を教師側がもってほしい。

例えば、話し合うときに、自分の本音を伝えることは「エンカウンター」であるし、話の聴き方の指導は「ソーシャルスキル」である。全体の流れを大切にしながらも、個々にアプローチできる教師力を身につけたい。

「冬山からの全員脱出大作戦」

内容：冬山に登った5人全員が谷間に転落し、3人が足を骨折する。幸い、中に10種類のものであったリュックが無事であった。メンバー全員が救出されるために10種類の中で必要なもの・大切なものの順に番号をつける。まずは、個人で順番をつけ、次にお互いの考えを聞きながら、班の意見をまとめる。

ビデオでは、落ち着いた雰囲気の中で、班で話し合う姿、リーダーが自分の班の考えを発表する姿が見られました。

班長のリーダーシップを育てる場面でもあり、自分の考えを自己開示する場面でもあり、お互いの考えをしっかりと聴く場面でもあります。また、お互いの考えの違いを知り、認めることや、自分の考えを修正すること。または、自分の考えを理解してもらえるように伝える力の育成など、たくさんの要素が詰まったエクササイズです。

話の途中でチャチャを入れないなど、聴く態度についてはソーシャルスキルの要素が入っています。お互いの本音を言い合う場面は、エンカウンター的要素です。

「ブラインド・デート」

内容：自分についてワークシートに書く。内容は例えば、自分が魅力を感じる異性の性格や自分のくせ、趣味や好きなことなど。それを教室中に貼り付ける。それを見て、クラスの誰が書いたものかをあてる。最後に教師が1人ずつプリントを読み上げ、本人が「自分のです」と告げることで、答え合わせをする。

ビデオを見ると、最初は列にして各自がワークシートを書いていたのですが、書き終わるとすぐに班形態に机を動かしていました。その動きが実にスムーズなことに、まず驚きです。

次に教室中に貼ってあるワークシートを見ているときの生徒の様子。雑然としたり、騒がしくなることもなく、非常に落ちついた雰囲気の中で活動しています。

最後にクラス全員の前でワークシートを先生が読む場面。笑顔があり、よい雰囲気です。「これは誰の?」「自分です」イヤがる生徒もなく、なごやかな雰囲気です。

いったいこの「風土」は、どうやってできているのか?その秘密こそ、知りたいところです!

重枝先生の言葉の中に、そのヒントがかくれています。

「千代中学校でこういう落ち着いた雰囲気をつくることは、かなり自分でもがんばっているところです。自分はアグレッシブな方なので、活気ある雰囲気をつくることは簡単です。しかし、落ち着いた雰囲気をつくることにあこがれてもいました。この雰囲気をつくるのは、くり返しと積み上げです。」

「エンカウンターを通して、生徒同士がつながっている。生徒と教師がつながっていると思えるこの時間は、自分にとっても大切な時間になっています。」

もうひとつ、大きなヒントがビデオの中にかくれていました。それは、黒板に書かれていたひとつの「絵」です。これは、エクササイズをする前に生徒に話したものでした。

その絵の説明を、こんな風に重枝先生はしてくれました。

「これが水槽の中だとする。1人が毒を吐いたとする。(暴言やマイナス発言など)

その中にいる人はどうなる?」

生徒の答え「毒が充満する」

「毒が充満したらどうなる？」

生徒の答え「息苦しくなる」

「息苦しくなったら、他の人はどうする？」

生徒の答え「毒を吐く」

「他の人も毒を吐いたらどうなる？」

生徒の答え「毒が濃くなる」

「毒が濃くなったらどうなる？」

生徒の答え「もっと苦しくなる」

「だけど、みんなが苦しくなったら毒を吐くかといえ、そうではなく、毒を吐かないで毒を飲み込んでいく人もいます。そういうおとなしい人がいたら、その人はどうなる？」

生徒の答え「・・・・・・・・」

その場で聞いている風土会の会場でも、しんと張りつめた空気が自然に生まれていました。重枝先生の話に聞き入っていました。

「その人は死ぬ」

「つまり、最初に毒を吐くのが悪い。それがなければ、こうはならない。」

ものすごい説得力です！！

このような、生徒の心に強い印象を残す、実感のある「たとえ話」をされると、授業の途中で雰囲気をごわすような発言はできなくなります。自分が雰囲気をごわす最初の人には、なれません。

きっかけをつくるのは「最初の人」です。それが引き金となって、はずみとなって、その後に加わってきた人達が、結局「けんか」になることは、よくある話です。特に力関係が働く場合、弱い者同士がケンカをすることになります。ケンカのきっかけとなった人は、おとがめなしです。この話は「いじめ」の話にもつながる内容です。

重枝先生の力量の大きさは、この「発想」「着眼点」にもあるのでしょうか。

生徒が納得していることで、あの落ち着いたある学級風土がうまれているのだと感じました。

3 エクササイズの体験活動

「冬山からの全員脱出大作戦」

ビデオで紹介されたエクササイズを体験しました。4～6人のグループで行いました。実際にやってみると、まず自分の考えを書く段階で、1～10をどの順番にしようか、迷いに迷いました。次に、グループ全員の意見を聞きました。みんなそれぞれに違う答えで、こんなにも考えが違うんだと実感しました。残念ながら時間が無く、どうしてその順番にしたのかを聞くことができませんでしたが、ぜひ聞いてみたかったと感じました。生徒はこんな気持ちなんだ、ビデオで見るだけではわからないなど、実際に体験することの大切さを感じました。実際に体験していれば、生徒がやっているときの声のかけかたが変わってくると思います。

例えば、順番がなかなか決められずに迷っている生徒に対しても、共感的な言葉をかけることができます。「早くしなさい！」という言葉にはならないはずです。

また、リーダーシップをとってくれる人がいるのは、心強いと感じました。いつもは、リーダーに対して、「リーダーだからリーダーシップをとるのが当然」という教師気分ですが、リーダーに対しても、「ありがとうね、リーダーシップをとってくれて」という気分になりました。

重枝先生の「このエクササイズでは、何を大切にしたら、ストーリーを話すこと。つまり、ロ

ジカルシンキング（論理的思考）の力をつけることにもなる。」という説明を聞いて、ビデオを見たり、ワークシートを見ただけでは気づかなかったことに気づかされました。

ロジカルシンキングとは、筋道をたてて考えることです。

3ステップ

- ① 「なぜ」グセをつける
- ② 紙に書く
- ③ 人に説明し、意見交換

※有名なのは、トヨタの「なぜ5回」

- 「なぜ、不良が起きたんだ？」 → 「設備が故障したから」
「なぜ、故障したんだ？」 → 「点検計画通りでなかったから」
「なぜ、計画通りに行われなかったんだ？」 → 「・・・だから」

普通、「なぜ」2回くらいのところを「なぜ」5回を必ず行う → 本当の原因が見えてくる

このような「考え方」を覚えたら、自分で原因究明ができる。そこから道が開けていく。

- 例えば・・・「将来サッカー選手になるためにはどうすればいいのか？」
「サッカーの強い高校に入るためには？」
「高校入試に受かるためには？」
「勉強する時間を生み出すためには？」

このように、自分で「なぜ？」「どうすれば？」を繰り返すことで、自分でみつけた論理は、自分の力になる。そういう「考え方」があるということ、体験的に身につけさせる。

また、「ブラインド・デート」は手を変え、品を変え、今回は3回目ということで、なぜ同じ事をくり返しさせるのか、その意図を尋ねました。

↓

「同じ事をする」のは、「できる、できる」と、生徒に安心感を与えることと「あ～、またか」という気持ちにさせる両面がある。表裏一体である。

「あ～、またか」という気持ちに対しては、「ねらい」を変化させたり、「やり方」に新しい刺激を加えたりすることで、解消できる。

また、前回やり終えた後に生徒に「気づき」がうまれている場合、もう一度発展させたり、あの時はうまくできなかったという思いを解消させたり、もう一度トライするチャンスとなる。何度か繰り返すことで、教師側も指示を少なくすることができる。そうすると、教師の言葉や指示が少なくても、自分達でできるようになり、それが、あたりまえという雰囲気が出る。

やはり、大きなビジョンと教育的意図がありました。

今回の学習会のキーワード

- ①友だちの考え方や行動を参考にしたモデリング学習
- ②友だちの目を通した自分についてのフィードバック
- ③自分と友だちの行動、感情、考え方の違いの比較から、新しい気づきがある
- 「集団主義」と「集団教育」の違い、「同調」と「協調」の違い
- 「マナーの共有」：「言われ守るのではなく暗黙のうちに心にもつこと」
- 親和動機
- ロジカルシンキング（論理的思考）

♪学習会に参加された先生方の感想♪ (参加人数 36名)

- ビデオを見ると、4月の段階でクラスに相手の話を聞くというマナーを身につけさせているところが素晴らしいと思いました。自分のクラスでは、4月でははじめなどできていたのが、6月になって少しずつ気のゆるみからできなくなってきているので、どういうしかけを担任としてやっていくか頭を悩ませています。
- 同じようにできるとは思いませんが、今日の授業、やってみます。千代中で生徒達が「自分のだ」とブラインドデートに書いたものをさっと手をあげているのに「すごい」と思いました。
- エクササイズを知りたくて参加しました。昨年度、夏の校内研修の重枝先生の講話がとてもよかったです。「毒をはく」の図がとてもよかったです。使わせていただきたいです。ブラインドデートを少しずつ変えて、何回かやってみて「恥ずかしがらない人間関係づくり」をやってみたいです。
- 生徒達が落ち着いた雰囲気をつくれるような刺激の与え方。難しいです。こちらが忙しくなると、ゆったりとしたムードで接することができず、突き刺すような声を出してしまっていることがあります。そんな風では、生徒が毒を吐いちゃいますよね。
- エンカウンターについてはほんの少し本で勉強したことがあるのですが、先生の板書やお話を通じて、新たに知識を得ることができました。私も授業ではグループ学習の導入を行っていますが、実際うまくいく点とそうでない点があり悩んでいます。でもお話の中にもあったように「しつけ」とエンカウンター内での「交流」をもう一度見直し、また頑張ります。
- 班形態の意義や目的など改めて勉強することができて、よかったです。自分が知っておくだけでなく、生徒に意識づけるために伝えておくことも大切だということが学べました。また、エクササイズでは、実際にやってみると意見交換のやり方の難しさにも気づきました。日頃、生徒達がとてもいい雰囲気ですムーズに意見交換できているのを考えると、集団にいい風土や効果的なイントロが浸透しているんだなあと感じました。
- 初めて風土会に参加させていただきました。エクササイズを取り入れた授業は勉強になりました。千代中のビデオ内でも生徒が楽しそうに、またお互いを考えながらの取り組みや班活動の進み方に感動しました。あらゆるエクササイズの意味をきちんと生徒に伝える伝え方の難しさ、大切さを感じました。
- ちょうど自然教室の班編成をしていたので、生徒達はこんなことを考えながら班のメンバーを決めていたんだと、ちょっと思い当たる点がありました。実際に映像で見るとイメージがすぐできるので、ビデオはとてもよかったです。毒を吐く話、大変印象に残りました。
- 学級集団の育成の意義や目標とする学級集団の話聞いて、あらためて納得ができた。実際にエクササイズをやるとなると、イントロが重要というのを感じるの、イントロの方法などをもっと勉強したい。自分の実践力を高め、重枝先生のようなプロになりたい。今日はありがとうございました。

♪お知らせ♪

- QUテストを開発された、河村茂雄教授（早稲田大学教授）の講演会が、心理学センター主催で行われます。
8月18日（月）時間は未定（14時 or 15時頃になりそうです）会場：博多商工会議所
「ソーシャルスキルとエンカウンター統合」や「hyper QU」「K-13法」についての研修をお願いしています。案内文が届きましたら、会員のみなさんにお送りします。

